

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第20回 若者の視点から見た「一式飾り」
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-10-24
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6247

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部教授 高橋 健司

第20回

これまで「一式飾り」の魅力や価値について、私自身の考えを述べてきたが、今回は若者の視点から、「一式飾り」の魅力に迫ってみよう。

2013年4月、私は鳥取大学に入学して間もない地域学部の新入生54名を連れて、鳥取県南部町で「法勝寺一式飾り」のフィールドワークを行った。鳥取や鳥根の出身の学生もたくさんいたが、誰も「一式飾り」を知らなかった。

調査後の学生たちのレポートを読むと、初めて作品を目にして、「ユーモアがある」、「どこか滑稽で味わいのある」、「じつくり見れば見るほど味わいがある」、「微笑ましい気持ち」、「じわじわとした感動」、「不思議な気持ち」、「生活用品に命が宿っている感じ」と、多くの若者が「一式飾り」の「見立て」の面白

若者の視点から見た「一式飾り」



さを挙げた。また、作品を探し歩いて、「人の温かみを感じ

ゆくりと流れている感じ」と、地域で長く愛されてきた伝統に、共感を示す者が少な

られる、「のど

かて昔ながらの雰囲気」、「なつかしくなるような気持ち」、「なじやかな気持ち」、「時間が

ゆくりと流れている感じ」と、地域で長く愛されてきた伝統に、共感を示す者が少な

くなかった。

そして、「暮らしに密着」、「日々の暮らしの中で無理をしない範囲で楽しむ」、「リサイクル精神がある」、「プロではなくて住民、美術館ではなくて各家庭」、「芸術は芸術家だけのものではない」と、地域の暮らしに根ざした文化を高く評価した。

2013年7月、今度は研究室の学生を連れて、出雲市平田町で「平田一式飾り」のフィールドワークを行い、11月には平田一式飾り保存会による出雲市立平田小学校の「一式飾り」の体験授業を手伝い、授業後に私たちも「ミニ一式飾り」を制作させてもらった。

作品を完成させた際の記念写真には、指導していただいた保存会の皆さんと研究室一同（右端が筆者）が写っている。机の上には学生たちの作品が並んでいる。

中央の2体が向き合う作品は「雨のプロポーズ」。雨が降る中、指輪を手に突然プロポーズした男性に驚き、思わず傘を落としてしまった女性

を表現した。穴あきの陶器を指輪に、急須のふたを傘に見立てた。

左の2体は「桜吹雪の金さん」。桜が描かれた箸置きを、もう肌脱いだ遠山の金さんの腕に見立て、腰を抜かした悪者とセットにした。

右の1体は「謝罪の殿様」。流行の映画をもじって、ひびまずく殿様を作った。

作品を制作した学生たちは、「どんどんアイデアが浮かんできました」、「時間を忘れるくらい夢中になれる」と語り、7名全員が作品を完成させた達成感や満足感を挙げた。

この中には平田出身の女子学生がいた。彼女は「平田一式飾り」が町に展示されるのを「当たり前」のように思っていたが、実際に制作を体験して初めて「魅力を再発見、再認識することができた」と記した。

確かに、身近なものほど価値を見出すのが難しい。学生たちは山陰の「一式飾り」に大きな魅力を感じているが、読者の皆さんはいかがだろうか。